

校長室だより

令和7年 7月24日(木)
第 17 号
十日町市立中条中学校校長室

不登校支援から夏休みの生活を考える

学校に行けない、いわゆる不登校は学校としても社会問題としても喫緊の課題です。当校でも数日欠席が続いたり、週のうち数回しか登校できなかったりする生徒がいます。それぞれの家庭と連携し、生徒の社会的自立を目指して対応しています。

今回は「不登校」について考えてみたいと思います。

新潟県は、不登校の未然防止のため、「子どもとともに1・2・3（ワン・ツー・スリー）運動」を行っています。当校でも確実に実施しています。これは、児童生徒の欠席が見られた際には、その初期段階（1～3日目）に、担任を中心に、教職員が組織的に対応します。



- 1日目：欠席家庭に連絡し、保護者又は本人から状況を聞く。
- 2日目：児童生徒の具体的な状況を電話等により把握する。
- 3日目：家庭訪問を実施し、保護者又は本人と面談する。

この取組の重要性を裏付けるような資料を見付けましたので、紹介します。

諸富祥彦さんという、カウンセラーとして学校で勤務経験のある方で、「いい教師の条件」（SB 新書）の中に以下のような記述があります。



不登校を防ぐ初期対応の鉄則「欠席は3日以内」

先生や保護者に知っておいていただきたい最大のポイントが「欠席は3日以内にする」ことです。これが「不登校傾向のある子ども」を「本格的な不登校の子ども」にしてしまわない初期対応の最大のポイントです。

例えば、火曜日に休み始めて、子どもが「お腹がいたい」「頭がいたい」と訴えています。やさしい親は「身体の調子が悪いんだな」としばらく休ませようとします。しかし、一般的に頭痛や腹痛で休むのはせいぜい2日程度ではないでしょうか。身体の不調を訴えて学校を休む場合も、それが3日続くと不登校につながってしまうことが多いのです。

子どもは「学校に行きたくない」という自分の気持ちをなかなか言葉で表現することができません。そのようなときのその気持ちは、よく「症状化」します。学校に行きたくないという気持ちが、身体症状となって現れるのです。火曜から休んで金曜日まで休むと日曜日までの6日間休んだこととなります。6日間一人でゴロゴロしていると身体がだるくなってしまっ、翌週も月曜日から登校しづらくなるのです。

私たち大人でも1週間ほど何もせずに家でただ寝転がっていても、次の日会社に出勤するのは、身体がだるくてしんどいのではないのでしょうか。私たちが何とか出勤できるのは、そうしないと給与がもらえないからです。しかし、子どもには給与も関係なければ、生活に支障も出ません。休んだところで「失うものがない」のです。そこで歯止めがきかずに1週間、10日、いつの間にか3週間、1か月となっていく。

不登校の最初のきっかけは、友達とのトラブルであったり、先生への不信感であったり、いろいろです。けれどもそれは単なる「きっかけ」です。

では、不登校の「原因」は何か。それは「身体の変容」です。「学校に行けなくなる身体」「動けない身体」になってしまうことです。そのスタートは「4日以上、学校を休むこと」これは大きなターニングポイントです。

すると、勝負は休み始めた3日目の夕方になります。その時に誰がどのような形で家庭訪問するかが勝負の別れ目になります。3日休んで翌日には学校に来るように働きかけ、もしダメでもその翌日には学校に来るように働きかけることで、初期に不登校を防ぐことができるのです。

この取組で、小学校の不登校は4割減になったというデータもあります。

いかがでしょうか。県が提唱し、当校が実践している「子どもとともに1・2・3運動」はスクールカウンセラーの立場からも理にかなっていることになります。

ここで皆さまと考えたいのは、「動けない身体」になる可能性のある夏休みの過ごし方です。明日から夏季休業になります。中学校の場合は、部活動があったり、体育祭のリーダー活動があったりと小学校に比べ、比較的登校したり活動する機会は多いかと思いますが、お盆期間のように連続して休みの日が多いのも事実です。



不規則な生活、ダラダラとした日が続くと、まさに「学校に行きたくない身体」になってしまいます。3日目がターニングポイントになりそうです。

また、自分の気持ちを表現する取り組みも大切なようです。2学期が始まり、仮に「学校に行きたくない」と思っている、自分の気持ちを伝えられなければ、「症状化」してしまうのです。

前回の校長室だより第13号には、言語発達を促す保護者の取組を紹介しています。

☐ 子どもの言動にすぐに反応する

→親がすぐに反応することで、子どもの情緒的な発達を促す

☐ 子どもに対して否定的な反応をしない

→にらみやさかめ面、舌打ちなどの否定的な反応は子どものストレスになる

☐ 子どもの表情や感情を言語化する

→「おいしいね」「楽しいね」などと、感情を言語化してコミュニケーションの発達を促す

☐ 子どもに対して笑顔などの豊かな表情を見せる

→表情は非言語コミュニケーションの好例。親が豊かな表情を見せることで、子どもは表情が豊かになる

生成AIに「中学生が夏季休業で規則正しい生活をするために」と問うと、以下のように回答してくれました。

- 1 毎日同じ時間に起きる・寝る
- 2 1日のスケジュールを立てる
- 3 朝ごはんをしっかり食べる
- 4 軽い運動を取り入れる
- 5 スマホ・ゲームの時間を決める
- 6 勉強は午前中に集中して行う
- 7 夜はリラックスタイムにする



どれも当たり前のことのようにですが、長い夏季休業を考えると意外と難しい内容かもしれません。元気で2学期を迎え、学校の大行事の一つである「体育祭の成功」から2学期の活動を始めましょう。